

## 第5章 考 察

### 1. 遺跡の立地条件の復元的考察

——とくに石川中流域の先史遺跡の立地について——

はじめに

石川中流域すなわち現在の市町村呼称でいえば、富田林の大半がそれに該当する部分であり、一部羽曳野市を含む。この地域の先史時代集落遺跡の調査は、下流域のそれに対して著しくおくれている事実については、既に述べたところである。しかし現在の状況からそうであるといっても、必ずしも出発点についてみればそうではない。中野遺跡については明治年間にその萌芽がみられるものであり、著名な国指定史跡国府遺跡（藤井寺市）の発見と大きく距離をへだてるものではなかった。また隣接する喜志遺跡についても、京都大学による大正年間の報告などがある。それらの研究はあったとしても、その後の追及が殆んどなかったといえる。本書で既に紹介、記述してきた内容は、それらを進める上での重要な資料となることは秘かに自負するところであるが、さらに目を転じて石川中流域という範疇でみれば、再び先の問題へと戻らざるを得ない現状である。

本稿では、この問題を一步でも進めるための一方法として、石川中流域の旧地形を現在の地形から考えられる範囲のなかで復元し、かつての地形環境がいかなるものであったかについて考えようとするものである。幸い当該地域は、近時宅地開発の大きなうねりがおしよせつつあるが、まだその地形に大きな変化を被っていないと考えられるところが多く残っている。すなわち、そこから復元される地形条件とかつての状況との間に大きな差が生じる可能性が、比較的少ないものと考えられる現状がある。以下具体的にその地形と復元地形にみる遺跡立地について考えたいと思う。

#### 中野遺跡の周辺

中野遺跡の周辺地形について、まずみることにする。現状では、周囲の大半が水田となり、一見平坦な感を与えるものである。また東方向の石川へ面する部分も西

側の田畑と若干の比高差を有しながらも、殆んど大きな差異を認めないものである。

富田林市によって、昭和46年に作成され、47年に一部修正された『富田林市都市計画図、其ノ5』によると、石川の西岸にひろがる水田面は、海拔43～49m前後で50mを越える地域はみられない。この平坦面をまづみるならば、大きく田の畔線が東西に蛇行していることが判る。この傾向は、石川東岸域についても同様であり、これらの畔線の蛇行が石川の氾濫によって生じたことは明らかであり、改めて記述を要しないであろう。その範囲がとくに西部域に大きくみられるのは、その小さくずれの東南方向で千早川と合流しており、その合流したことによる流水路の変化からもたらされた結果と考えられるのである。

これら直接石川の水によって洗われる水田面から西には5～6mの比高差を保って、上面に台地がひらけている。いわゆる河岸段丘上に位置する部分であり、その地形をみると東北が低く、西南方向にゆるやかな傾斜をもって高くなっている。ただし、この台地は西北部での傾斜がわずかながら大きいことが指摘される。すなわち、ゆるやかな殆んど傾斜を感じさせない平坦部分は、東西400、南北500mの範囲である。現在この東限と考えられる部分を深溝用水という用水路が南北に通っている。

さらにこの平坦部分の北部には、南東方向に開口する比較的深い谷が復元される。この谷の奥部には粟ヶ池があり、同池の約100m以上をはかる南堤の存在は、その谷をせきとめて作ったことを示している。

この粟ヶ池の東には、その南でみたのと同じく平坦な土地が広がっており、北方へのびている。一方、池の西側では比較的傾斜面が認められ、丘陵部が迫っている状況がよく観察される。この旧地形復元から集落立地の可能性、あるいは最もその立地に適する地を選定するとするならば、先述の粟ヶ池南部の東西400m、南北500mの平坦部といえるだろう。

中野遺跡の調査結果からみると、78年大谷女子大学が調査した中野遺跡D4区では、東西方向のV字溝が検出されており、その周辺の地形復元をみる限り、その部分は谷に面した台地端に近い個所ということになる。きわめて小範囲の知見であるため速断はさしひかえねばならないが、溝の方向は、その地形復元でみる限り、谷

に面した台地端にきわめて近い個所ということになる。すなわち溝の方向は、その地形推定と同じくほぼ西方向へ斜めにのびていくようであり、注目に値するだろう。これと同様の遺構は、喜志遺跡でも確認されており、その推定に大過ないとすれば、この溝を集落端の境界とみるのが可能である。いいかえれば中野遺跡の北端に近い部分が当該D4地区周辺と考えられるのではないかとと思われる。同様に喜志遺跡の南限についての調査結果が明らかになっていないが、あえて推定すれば、この谷に面した南端までをその範囲とすることが、立地条件からして可能であるが、現在のところ、その地域で遺物が採集されたということを耳にしていない。とりわけ粟ヶ池の北側にみえる桜井町二丁目付近で大きく谷が西に入り込む可能性もある。またこれらを区分する自然境界たる谷は、粟ヶ池を構成する谷よりはるかに小さく狭小なものである。

さらに今回の調査結果から中野遺跡の西限を限定しえんとすれば、先の地形復元からの推定部分よりも、やや狭くする必要があるだろう。とくに西方へ延長したトレンチで何ら遺構、遺物を検出せず、地山面の変化がみられないことは、それを証明するのに十分であるといって過言ではない。この推測が正しいとすれば、その遺跡立地は明らかに海拔57～58m前後のところで終わっているといえるのである。これを丘陵傾斜と関係があるとするならば、等高線の間隔から判断して、南限はせいぜい海拔60m前後のところに求められるだろう。

蛇足ながら、粟ヶ池の問題について記述しておきたいと思う。粟ヶ池の東には東高野街道が通じており、この道の開通以前には少なくとも粟ヶ池が完成していたことが推定される。さらに南堤の東西方向にのびる線は、近接地域の条理の畔線と平行しており、条里はこの池の造築と周辺地域の開墾とは時を同じくしているものと考えられる。また既述の調査では条理の年代を推定する遺物、遺構は検出されておらず、今後、残りのよい畔線を含む広範な本格的調査がまたれるところである。

### 3. 石川中流域全体の状況

目を石川中流域全体に転じてみれば、とくに田の畔線が乱れているところは東側部分である。とくに積石塚の如く径20m前後、高さ15m前後の小丘は、石川氾濫によって流出した土砂、とりわけ礫石を積んだものと推定され、その洪水が著るしい

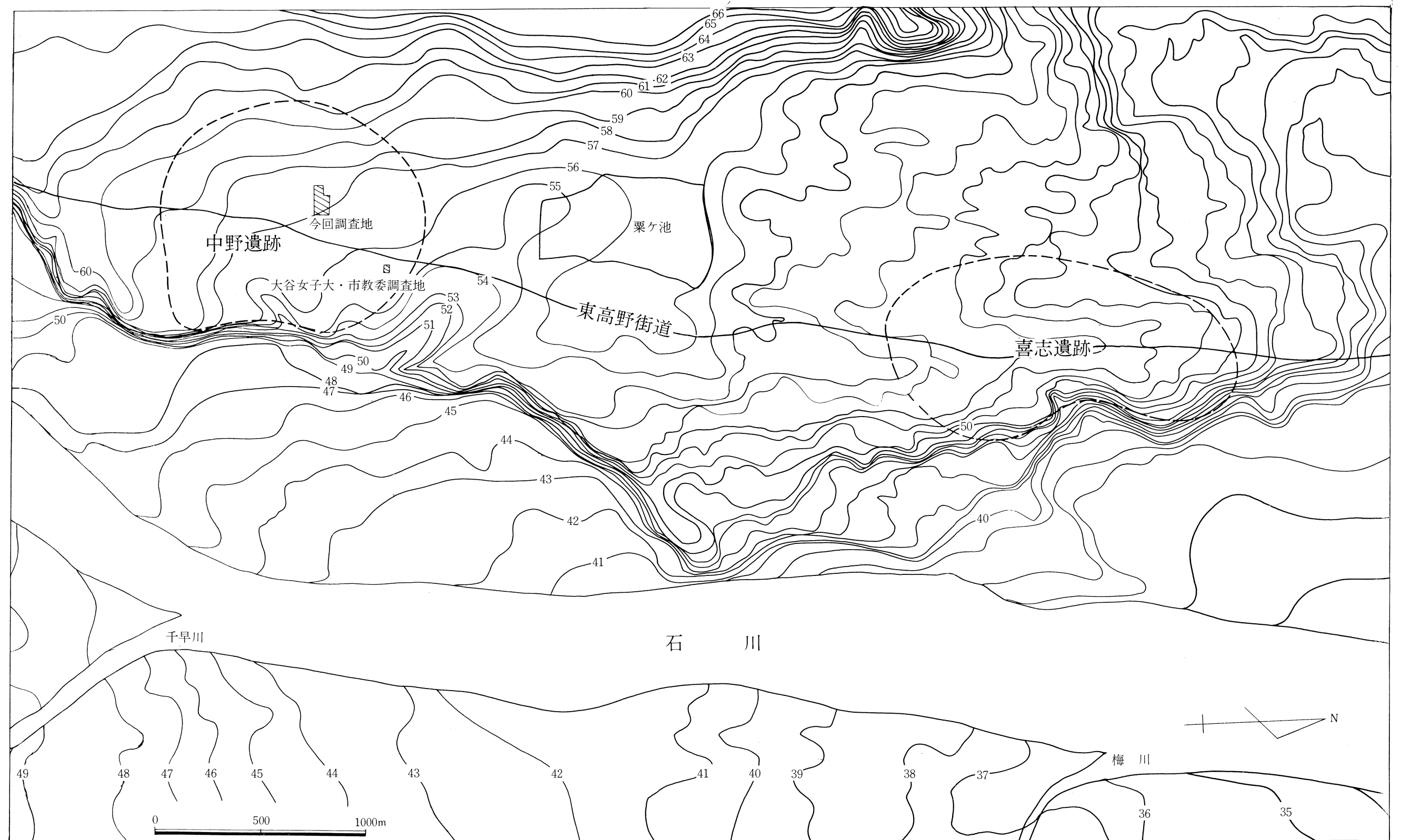


fig. 18 中野遺跡周辺の地形復元図

ことを示している。その状況は等高線をみてもよく看取しうる。すなわち、比較的平坦地であり、南北地域に大きな比高差がみられず、洪水の堆積土砂による可能性が強い。これに反して東岸域は、崖面が石川の近くまで迫っており、部分的には著しい浸蝕を受け、あるいは現在も受けつづけているところがある。石川の川床面から河岸段丘上の台地まで、9 m前後をはかる。このように比高差をはかるところではあるが、段丘上の台地の面積は先述の北部地域の如き平坦地はきわめて少なく限定される。この傾向は、さらに南部地域でも、同様の状況を呈するところである。河内長野市との境、石川東岸、伏見堂地域でもかろうじて最大限、東西 200、南北 300 mの範囲での平坦地しか求められず、また石川をはさんだ北西部にも東西幅 100 m前後の平坦地を求めるのがせいぜいという状況である。石川は伏見堂地域附近で大きく蛇行し、現在も西岸を著しく浸蝕しつづけているが、かつての状況を推定する材料は殆んどない。しかし西岸域の丘陵が迫っていることから考えると、東岸域が浸蝕されたと考えざるを得ず、少なからず平坦地が失われたものと考えられる。

一方北へ目を転ずれば、石川東岸では先の石川范濫原の範囲がかなりの地域、すなわち板持、山中田周辺にまで及んでいた可能性を示唆する。すでにみた如くの石川西岸の平坦地は、約 300 m前後の間みられず、宮甲田周辺でかなり大きな範囲で平坦地が所在する。とくに宮甲田では舌状に張り出す台地が復元されている。一方、北甲田では石川の段丘面から広範な平坦面をなし、さらに一段高い平坦面という二段にわたる台地面を形成している。

このうち下方の下位段丘は、比較的狭小な範囲ではあるが、平坦地としては、十分集落遺跡が立地可能な部分である。この甲田地域と現在の富田林市街地の間には、南東に開口する大きな谷が所在することが復元地形から推定される。すなわち、これによって、甲田地区とその北部域とは明らかに区分されることが判るのである。この部分から北へ約 400 mの地点が先述の中野遺跡であり、その北部にも大きな谷の所在することについてはすでに述べた如くである。

以上紹介してきた石川中流域の各台地の立地条件は、そのすべてが段丘上に位置し、大洪水の心配は全くないということが確認された。また当該各地域に分布する

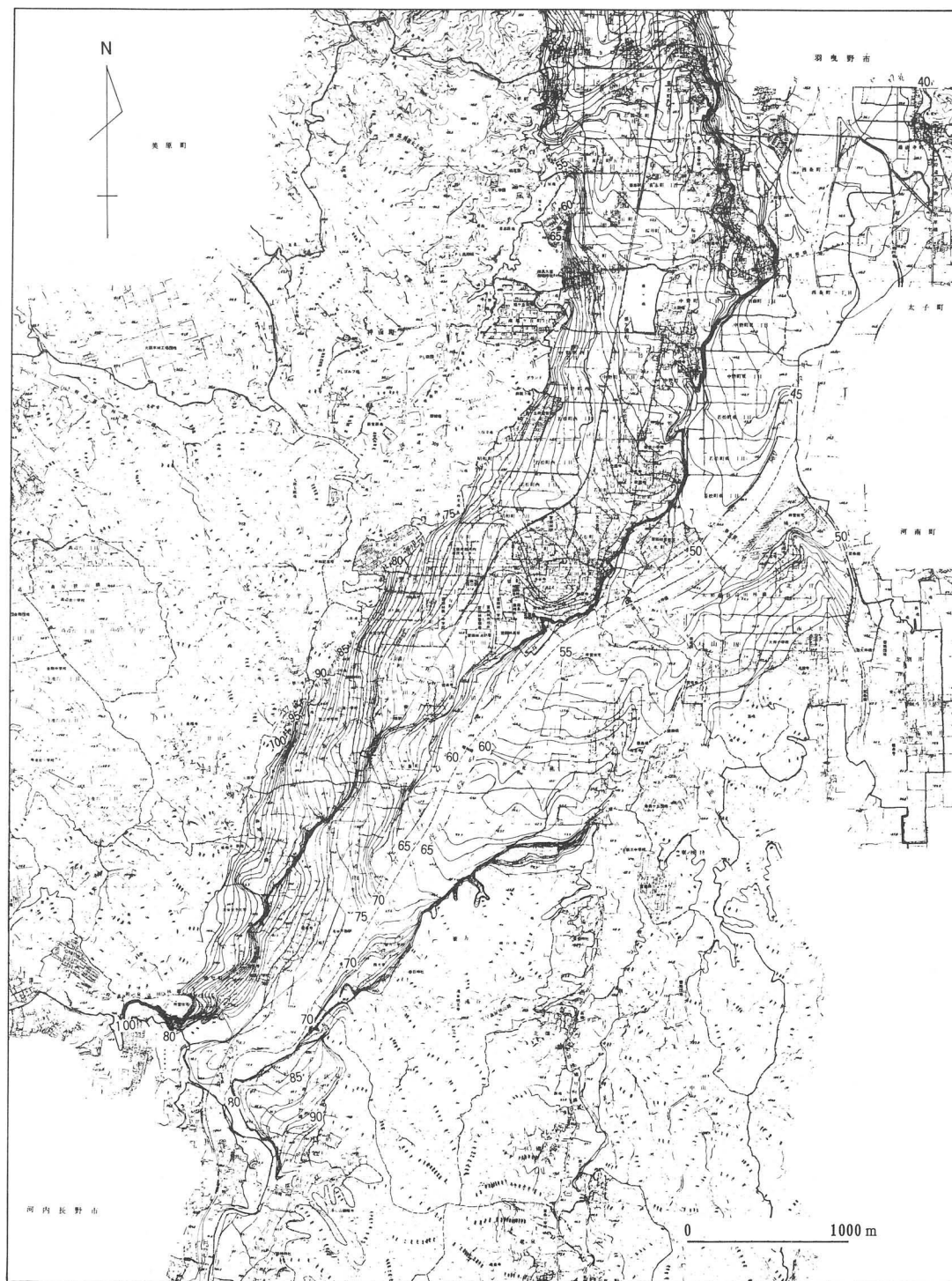


fig. 19 石川中流域の地形（富田林市都市計画図より作成）

遺跡のわずかな調査結果からではあるが、それら遺跡が、いずれも大規模な冠水をこうむっていないことが明らかとなっている。これらから導き出された結論は、明らかにこれら地域の遺跡は洪水を意識し、かつそれをさける意図のもとにつくられたものであるということであり、そのもつ意義は大きいのである。その意義を考える第1段階として、以下に石川下流の大和川下流域の大和川氾濫原に位置した弥生集落との関係について若干の問題を記し、結語としたいと思う。

#### 4. 結語にかえて

すでに石神怡、松田正昭氏らによって大和川の氾濫と旧水系路についての復元が行なわれており、それら先輩諸氏の業績を引用させていただくこととする。この地図は明治年間に陸軍によって作成された2万分の1の地図を原図に行なわれたもので、開墾の著しい同地域の地形を詳細に観察しうる好資料といえる。

この地図によると生駒山麓の水系に、北方に流れるものでは、串田川、長瀬川が大和川付替後も明らかに流水路を保っているものであることが判る。さらに西北方向へは平野川が所在し、かつての大和川の複雑さを如実に示している。これら三つの水系は、ここに示した図によると、いずれも等高線が谷状を呈する部分に該当することが判る。

一方、この水系に囲まれた海拔5～10m前後の平野部には、数多くの遺跡が分布している。串田川と長瀬川の間には、瓜生堂遺跡が所在し、長瀬川と平野川の間には衣摺、久宝寺、亀井などの各遺跡が所在する。これらのうち、比較的調査が進展している亀井、瓜生堂遺跡についてみると、いずれも遺構面上に出水によって出来たと考えられる自然堆積層が存在することが報告されている。自然堆積層は、明らかに周辺河川の氾濫に伴うものであり、そのための被害は著るしいものであったと考えられる。地形復元を試みると、全体に殆んど比高差を認めない平坦地であり、また河川面との比高差も、せいぜい1～2mという事が判る。すなわち、このため若干の増水によって水面下に没するという事は容易に想像される。言を変えれば海拔10m以下の各集落遺跡は、たえず洪水の危険にさらされていたといって過言ではない。

一方、農耕を伴う生活は、低湿地の肥沃な土地を求め、そこに定住せざるを得な

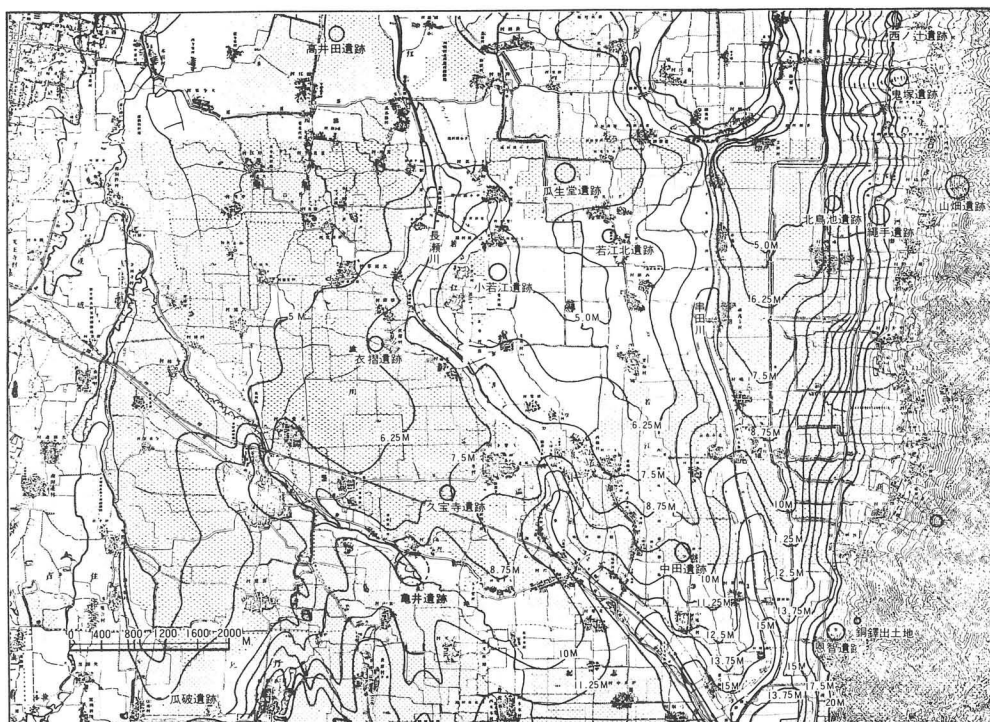


fig. 20 生駒山麓の地形（石神 怡「八尾市亀井遺跡発掘調査概要」1971より）

い状況を生じさせる。この範疇においては、氾濫原がその適地となり、いわば利害相反する条件を内在するという点において初期弥生集落が成立している。河内平野の前期弥生集落も、その例外ではない。すなわち大和川とその支流の氾濫原がもたらす肥沃な土地は、彼らの生活の拠点として最適なものの一つであったと考えられる。これは、各地点の遺跡が前期に成立し、拡大することからも明らかである。

しかし、この肥沃な平野も、中期に入ると既述の如く、大きく遺構の上に推積層を認めるという大規模な洪水が襲っている。彼らの大半は、その生活拠点を放棄し、新らたな場所への移動をよぎなくされたことは容易に推定される、その移動先については、水系をたどって石川中流域へ、あるいは他の地域へという事が考えられる。すでに紹介した如く、石川中流域の遺跡が、いずれも台地上に形成されている事実は、その前提条件に伴う移住であったとすれば、まさに最適地を得たという事にもなろう。地理的にも近接しており、また水系という一連の系統的な状況もあり、あながち大きく的をはずしているとも思えない。



この地への新らたなる定住者は、二上山の豊富なサヌカイト原石をもとにして、石鏃、石槍をはじめとする石製利器の生産に携わり、再び中河内の平野にもどっていった集団との間に流通関係が発生、展開したと考えることも不可能ではない。喜志、中野両遺跡で検出されたきわめて多量の石製品、なかでも未製品の存在などは、それを証明する一資料といえよう。

以上、結語にかえて遺跡の立地環境から考えられる様々な問題について記述を進めてきたが、もとより十分な考証を加えて実証すべき性格のものであることは承知している。今後の残された中野遺跡D4区調査の遺物整理を通じてより一層の発展を期したいと望んでいる。

末筆ながら、本稿のなるに当って多くの示唆をいただいた北野耕平先生に厚く謝意を表したいと思う。

(中 村)

## 2. 中野遺跡出土遺物の蛍光X線分析

### 1. はじめに

須恵器、土師器、弥生式土器、石器など考古遺物の原産地を明らかにし、かつその流通交流範囲あるいは文化圏をも究明しようとする研究は、近時とみに盛んとなり、その成果も増加しつつある。

とりわけ、その原産地あるいは供給源が明らかな石器、須恵器についての分析、研究が先行し、興味ある問題が提示されるにいたっている。石器については、二上山をはじめとするサヌカイト原産地の各原石にみる元素組成、須恵器については、和泉陶邑窯をはじめとする各生産地出土遺物にみる元素組成の分析が実施され、各々の標準資料の内容が明らかとなっている。これら各原産地(供給源)の各資料分析が終盤に近づきつつあり、各消費遺跡出土遺物について、その供給源の究明も十分可能な状況となってきた。

その原産地(供給源)推定を可能にする元素組成分析の手法としては、放射化分析、蛍光X線分析、X線回析法などがあるが、とりわけ前二者の研究活動が活発である。これらは、いずれも少量の試料で、主成分から微量成分にいたる広範囲の多元素を同時に定量しうる特徴を有するものである。一方、そのうち放射化分析法は、